

がん患者サロン、開催しました!

がん相談支援センター 太田 英恵

新型コロナの流行で中止していましたががん患者サロンを、今年度から再開致しました。6月26日、久しぶりの開催に職員もドキドキしていましたが、外来に通院中の方を対象に9名にご参加を頂きました。

サロンに参加しようと思ったきっかけは、「同じ体験をしている人と話をしてみたかった」、「テーマに関心があった」、「知り合いが参加するから」、「たまたま受診日で病院に来る日だったので」等様々ではありましたが、ほとんどの方が初めてのご参加でした。

血液内科大坂医師の「がんと免疫について」の講演を皮切りに、グループに分かれて日頃の状況や悩みなどを語り合いました。

「自分以外の体験や、考えていること、思っていること、ストレスの解消法などを聞くことが出来た」「医師から詳しい話を聞くことが出来たのが良かった」といった感想を頂いています。

今年度がん患者サロンの開催は全3回の予定で、今後は9月19日にがん患者団体に在籍しているがん体験者



の方から「がん患者自身ができること」をテーマにお話しいただく会を、10月17日に管理栄養士、理学療法士より「栄養と運動」について話題提供していただく会を企画しています。

この情報誌が発行された時点ですでに開催が終了しているかもしれませんが、来年度も様々なテーマで企画する予定です。

当院のがんサロンのキャッチフレーズは「ひとりじゃない、サロンでつなぐ心の絆」です!参加者同士で想いを語り合い、がんと共に生きていく「ヒント」を得ることが出来れば、と考えておりますので、ぜひご参加下さい。お待ちしております。

がん患者サロンについてのお問い合わせ、ご相談については
03-3269-8137(がん相談支援センター直通)
平日 9:00~16:00 にご連絡下さい。



独立行政法人 地域医療機能推進機構
東京新宿メディカルセンター

発行:JCHO東京新宿メディカルセンター がん診療委員会
〒162-8543 東京都新宿区津久戸町5-1
電話 03-3269-8111 (代表) URL : <http://shinjuku.jcho.go.jp>



独立行政法人 地域医療機能推進機構
東京新宿メディカルセンター

がん診療情報誌

いきいき かぐらざか

れんげ草には「心が和らぐ、苦しみを和らげる」という花言葉があります。
「みなさんが自分らしく過ごせるように」という意味をこめて情報誌を作成しております。

Contents

- 血液がんに対する免疫療法・・・1P-2P ●患者サロン開催しました・・・4P
- 薬剤師外来の取り組み・・・3P

JCHO東京新宿メディカルセンター がん診療委員会

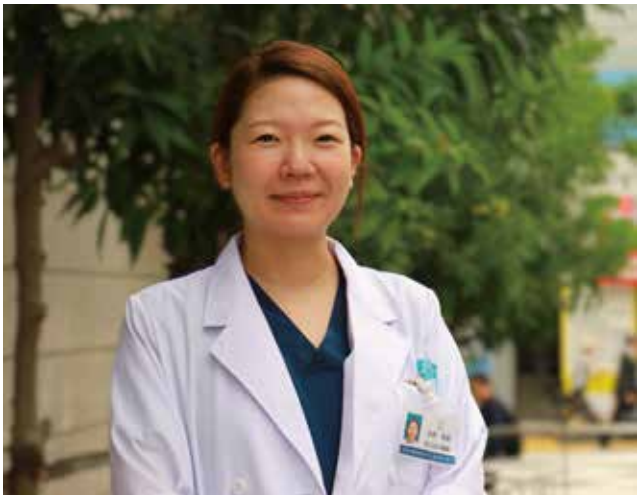


れんげ草

血液がんに対する「免疫療法」

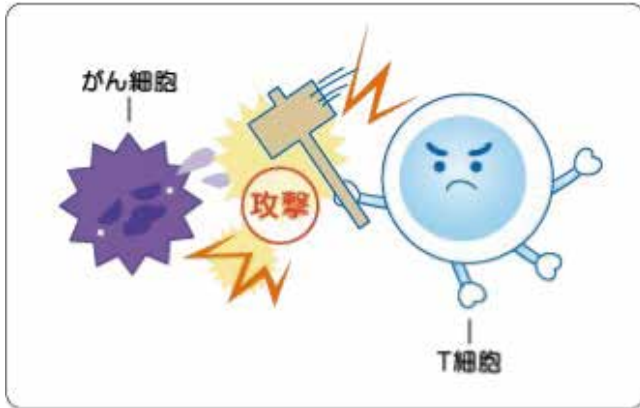
血液内科 牧野 晴斐

がん治療は、外科手術、薬物療法(抗がん剤)、放射線治療の3つの大きな柱からなります。白血病や悪性リンパ腫などの血液がんは、血液やリンパ液の流れに乗ってがん細胞が全身を循環するため、いわゆる大腸がんや肺がんなどのような固形がんと違って、手術によるがん細胞の除去ができません。しかし、血液がんの細胞は薬物療法の効果が出やすいという特徴が一般的にあり、治療は薬物療法が中心となります。そのため血液がんは薬物療法の発展が目覚ましい分野でもあります。その中でも、特に最近注目されているのが、「がん免疫療法」という治療です。ヒトの体には、ウイルスやがん細胞などの異物を攻撃する免疫という仕組みが備わっています。一方で、がん細胞は免疫システムをだましたり、弱めたりすることで、攻撃されずに増殖していくことが分かっています。この免疫システムを活性化して、がん細胞を攻撃できるようにする治療が、がん免疫療法です。がん免疫療法は「免疫チェックポイント阻害剤」などが、すでに固形がんでも使用されていますが、今回は、免疫療法のなかでも、血液がん使用される「キメラ抗原受容体T細胞療法(CAR-T療法)」「二重特異性抗体薬」、に焦点をあててお話しします。



にがん細胞の目印を見分ける遺伝子を人工的に組み込んだ、「CAR-T細胞」を用いる治療です。CAR-T細胞ががん細胞に結合し、がん細胞を攻撃します。患者さんからT細胞を取り出し、海外の製造施設に輸送、そこで遺伝子改変、増殖が行われ、治療施設に戻ってくるという過程を踏む必要があります。そのため、認定された施設のみでしか治療が行えず、都内でも限られた施設でしか行うことができません。また、製剤が出来上がるまでに1-2ヶ月有するため、その間に病気を抑えておく必要があります。しかし、一度体に投与されると、そこでT細胞が増殖し、体に残り続けるので、1回の治療につき1回の投与で治療が終了となります。

二重特異性抗体薬は、薬剤ががん細胞とT細胞の表面マーカーに結合して二つをつなげることで、T細胞ががん細胞を攻撃する薬です。こちらは従来の抗がん剤のようにすでに製剤化されており、特に施設は限定されておきませんので、CAR-T療法よりは、アクセスがしやすい薬剤と言えます。また、薬さえ準備できれば、投与したい時に投与できるのも利点と言えます。しかし、他の抗がん剤などと同様に、時間が経つと体から薬の成分がなくなってしまうため、効果がある限りは、治療を続けてい



出典元:がん情報サービスホームページ

CAR-T療法は、患者さんの血液から取り出したT細胞

く必要があります。

がん免疫療法は、従来の抗がん剤治療とは違うアプローチでがんを攻撃しますので、抗がん剤が残念ながら効かなかった、または再発した患者さんにも、一定の治療効果が示されており、治療の選択肢が増えた画期的な治療法と言えます。また、免疫療法は、従来の抗がん剤と違い、正常な細胞は攻撃しないため、血液毒性や脱毛、粘膜障害といった副作用は少ないものの、免疫細胞ががん細胞を攻撃する際に、過剰な免疫反応が起こり、発熱や血圧低下などの全身性の炎症反応や意識障害などの症状がでる神経毒性には注意が必要です。これらは、起こったとしても一時的で、適切に対処すれば、数日で元の状態に戻ります。現在、CAR-T細胞療法や二重特異性抗体薬は、再発または難治性の悪性リンパ腫や多発性骨髄腫に保険適応されています。ご自分の病気に適応があるかなどの詳しいことは、担当医に確認してください。

注意していただきたいのが、免疫療法には、「治療効果や安全性が科学的に証明された免疫療法」と、「治療効果や安全性が科学的に証明されていない免疫療法」があります。厳格な治験や臨床試験を経て「効果が証明された免疫療法」は、保険診療（公的医療保険）で受けることができます。「治療効果や安全性が科学的に証明されていない免疫療法」は、自由診療として行われており、効果が証明されておらず、医療として確立されたものではありません。「自由診療として行われる免疫療法」を考える場合には、治療効果・安全性・費用について慎重な確認が必要です。必ず担当医に話しましょう。

最後に、従来のがん治療といえば、「胃」「大腸」「肺」など臓器ごとの治療が、それぞれの専門医によって行われていました。しかし分子標的薬などの抗がん剤や免疫療



出典元:日本臨床腫瘍学会ホームページ

法など、治療法の急速な進歩と多様化により、臓器別がんを診るのではなく、横断的にがん診療に関わる腫瘍内科医による専門的な治療が求められるようになっていきます。日本臨床腫瘍学会ではこのような腫瘍内科の育成のため、『がん薬物療法専門医』という幅広い臓器のがん薬物療法の知識と技術を持った専門医制度を設けており、質の高いがん薬物療法を実現するために活動しています。私は血液内科が専門ではありますが、より幅広くがん診療に関わりたいと考え、昨年度この専門医を取得しました。それぞれの専門医やメディカルスタッフと連携しながら地域の皆さまに安心して当院でがん治療を行っていただけるよう体制を整えていきたいと考えています。



<チーム血液内科> 左から 牧野医師 大坂部長 秋山医長 泉山医師

安心して治療を受けて頂くために～薬剤師外来の取り組み～

主任薬剤師 藤掛 沙織

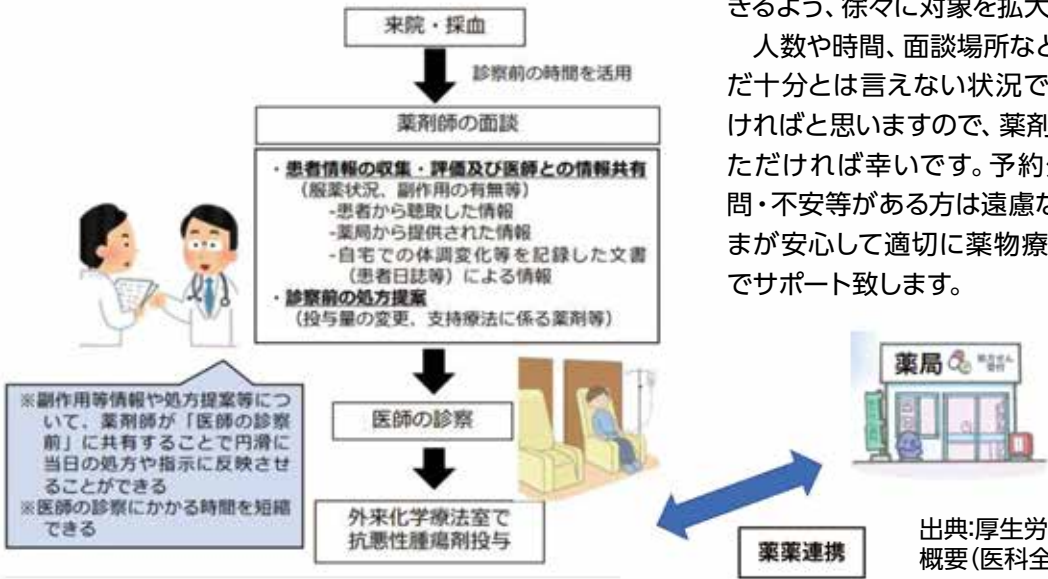
皆さまは、病院薬剤師が普段どんな仕事をしているか、ご存じですか？

1956年に法律で医薬分業が規定されたことをきっかけに、外来調剤は徐々に院外の保険調剤薬局へ移行し、病院薬剤師の業務は入院患者さまに対する業務が中心になってきました。外来患者さまの中には、「病院薬剤師ってどこにいるの?」と思われる方もいらっしゃるかもしれません。しかしここ数年徐々に薬剤師が外来に出ていく機会が増え、最近ではほぼ毎日、様々な診療科で薬の指導を担当しています。今回はそんな当院の“薬剤師外来”の取り組みについてご紹介します。

“薬剤師外来”とは?一般的には「外来診察の質の向上目的に、薬剤師が外来で薬の副作用や服薬状況などを確認・指導すること」を指します。

日本では医療技術の進歩により、以前は入院が中心だった治療も徐々に外来に移行し、入院患者さまの平均在院日数は年々短縮しています。特にがん治療においては、2007年のがん対策基本法をきっかけに、急速に外来化学療法が普及しました。医学、医療の進展により予後が大きく改善された昨今、通院でがん治療を行う人も非常に多くなり、仕事、家事、趣味など「日常生活とがん治療と両立」は治療を継続する上でも大切なポイントです。一方で、超高齢化が進むなか、外来患者さまの年齢層も高齢化し、薬の種類も数も増え、“薬を適切に管理する”という課題が浮き彫りになってきました。抗がん剤はもちろんのこと、副作用をコントロールする薬や、常用薬など、多くの薬を適切に管理・使用しながら、上手く治療と付き合っていくことが求められます。

当院では、外来化学療法を立ち上げた日から継続して外来化学療法室に薬剤師が配置され、薬の指導や副作用への対処法の説明などを行ってきました。加えて、



出典:厚生労働省「令和6年 診療報酬改定の概要(医科全体系)」から筆者作図